翻訳・解説

社会主義の諸段階と危機
——フランシス・コーエン(Francis Cohen)との対話——

ジョルジ・アツェール
(訳：堀　林　　巧)

〔訳者はしがき〕ここに紹介するのは，ハンガリーの英字誌 The New Hungarian Quarterlyの1982年秋季号に掲載されたダイアローグである。The stages and crises of Socialism－a Conversation with Francis Cohen とのタイトルが付されているが，原本があり，Conversations sur Socialisme のタイトルで1982年4月にパリのÉditors Sociale から出版されている。前掲誌に収録されているのはおよそ300ページにもおよぶ原本の終章（8番目の対話）にあたる部分のみである。

ハンガリー社会主義労働者党幹部ジョルジ・アツェールとフランス共産党付属マルクス主義研究所員フランシス・コーエンの対話の形式をとっているが，内容的にはコーエンがインタビュアーとなり，彼の質問にアツェールが答えるという展開となっている。

アツェールは，1917年生まれの65歳，1970年以降党政治局員，現在は副首相も兼ねるという文字どうり現ハンガリー最高幹部の一人である。文化・イデオロギー担当をつとめ対外的には比較的リベラルな思考の持主として知られている。

ハンガリーは，今日わが国においても，ソ連型とは異なる経済システムを志向する国として広く知られるようになってきているが，その土壌となっている政治文化を検討・紹介したものは極めて少ない。その空白を埋めるという意味もあって，訳者は以前ニェルシュの論文「ハンガリーにおける政治的発展と経済的発展の相互関係」の紹介を試みたことがある（『金沢大学経済学部論集』第3巻，第2号，1983年3月）が，本ダイアローグ訳出の意図もそこにある。アツェールの発言を通して，いわゆる「スターリン問題」に対する現地点のハンガリー党幹部のアプローチの仕方を知ることもでき，現在のハンガリーの政治文化を理解するうえでの一助となろう。

コーエン…　最後の話題にはいる前に，この対話のパートナーである私たちの関係を説明しておいた方がよいと思う。

私の方からいうと，フランスにおける社会主義の展望や現存社会主義の歴

史について思いめぐらす時，フランスのコミュニストの念頭に浮かぶ疑問点のいくつかをあなたに投げかけてきた。それは，何よりもまずあなたの祖国である社会主義ハンガリーと関連を持つ問題である。というのは，ハンガリーの実験はしばしば語られるわりにはあまり知られておらず，最も重要な主題の一つとなるからである。

社会主義の現実がどのようなものであるかについて認識を深めるというのが私たちの目的であった。つまり，この現実に対して何らかの判断をほのめかしたり，はっきりとした評価を下すのが目的ではなく，読者が社会主義を展望する時の追加的知識を授け，思考のための糧を提供するというのが目的であった。

あなたは，社会主義国の幹部の一人の仕事部屋に入る機会を私に与えてくれた。つまり指導部の動機や行動，成果，展望といったものについて率直に私に語ってくれた。私たちが一般的結論のいくつかを引き出す前に，あなたの方から外国の読者に向けてあなた方幹部の指針となっている原理，いわば信条といったものを説明してもらえるだろうか。

アツェール…　単に儀礼として言うのではないが，歴史上重要な諸時期における進歩によってフランスは理性の国との評価を受けた。しかし，後承知のように理性は単にフランスに授けられた特典というばかりではない。ヘーゲルによれば，理性の裁きの前に万物は自己を正当化しなければならない。

資本主義は理性の王国とはならなかったし，人間的なるものと合理的なるものを結合しはしなかった。そこで，私たちの時代に現実認識の可能性を持っているのは弁証法的・史的唯物論だけである。したがって，社会主義を検討しようとするならばそれに依拠しなければならない。

デカルトの論証を再生すると次のようである。「神完全なりき。神存在せずんば，完全にあらず。故に神存在せり」。私たちと同時代の特定の人々によれば，社会主義とは定義上完全な社会である。ところが，現存の社会主義は完全な社会ではない。したがってそれは社会主義ではない。このように論を進めつつ，彼らは社会主義が直ちに全てを提供することを期待し，全てが揃っていないことをもって社会主義を非難する。

このような論証の仕方は誤りである。完全な社会などいまも存在しないし，永遠に存在しないであろう。共産主義のもとでさえも，社会は，人類の創造力が直面する新しい課題や矛盾を常に経験するであろう。私たちは，人間社会が最も複雑な機械の構造よりもはるかにもっと複雑なことをしばしば忘れがちである。

レーニンの有名な比喩のように，社会主義への道は一種の登山であると私は思う。自分たちが征服しようとする頂上から一時たりとも目を離さず，地形や絶壁や雪崩に注意を払わない人々がいるが，彼らは熱狂的ドグマティストであり大飛躍の信奉者である。他方で，なんとか中腹にまで到達したことで満足してしまう人もいる。これらのオポチュニストはそこで休息をとり，他の人々がそれ以上登り続けないよう説得する。とどのつまり，彼らは頂上はないのだ主張しているのである。真の登山家は，頂上に到達しなければならないが，そのためには絶壁を巡り，迂回路をとり，時には障害物を避けるため下山すら必要であるということを知っている。私たちもそうあろうと努めている。

いま頂上について云々するのはまだ早すぎる。私たちコミュニストは自分達の思想を表明しようとして確信（conviction）という言葉を使用するが，私の場合は，「確信を持つ」（have faith）という動詞を用いるのを常とする。しかし，これでもっていっさいの疑いや探究を排除してしまうような確信のことを意味しているのではない。強調しておくが，私は究明された歴史法則に基いて共産主義の理念及びその現実的可能性を信じているのである。

コミュニストは最初はごく少数であった。メーリングは，このことを一片の紙切れで全世界のコミュニストの名簿の記載が可能であろうというふうに婉曲的に表現した。また，レーニンは「我々は大海中の一滴である」と述べた。しかし，いまや共産主義がその信奉者を欠く所は世界のほぼ二百ヵ国のうちでただの一つもない。一体，どうしてであろうか。それは，社会主義だけが人類にとって重要な諸問題について解答を持ちあわせているからである。

コミュニストとしての人生が，剰余価値論を学んだことや『資本論』を読んだことで始まるという例は稀である。公正への欲求，搾取から自由な，よりよき，そしてもっと人間的な生活への渇望が人をコミュニストにするのである。

プロレタリアートが貧困の中に生きている一階級であるというばかりではなく，偉大な歴史的行動の使命を帯びた階級であることを発見する以前の青年マルクスは，私の記憶によれば，なぜコミュニストになったのかと問われて「苦悩している人間にたいして無関心のままではいられないからだ」と答えている。だが，欲求は理論と，現実についての知識と結合されなければ無力である。

私たち小国のハンガリー国民は支配階級の無責任さから破滅的戦争に投げ込まれた。究極的に，クレバスから這い出しておそろしくも難解な生存の諸

問題に対処しうる道を私たちにさし示したのは社会主義であった。過去を完全に認識してこそ初めて1917年に切り開かれた道の意味が理解できるのである。

私は，発達した資本主義の賛美者に対して次の二つのことを言いたい。

第一に，資本主義の獲得物は，多くの動乱や政治的後退を含む何世紀かの果実であり，間違っていなければ，フランスがルイ14世の晩年の経済水準に到達するのに46年を要したし，7月14日が国民的祝日にされるのに91年かかっている。（これに対して）社会主義はまだ若い。劇的なつまずきもあったが，それは誇りうるべきものを色々もっている。

第二は次のことである。チャーチルは，ボルシェビキは二，三週間しかもたないだろうと予告した。クレマンソーはもっともきびしい評価をした。アメリカのある新聞はわずか一年間に8回以上も若いソビエト国家の崩壊が確実であると予言した。レーガンは，今日，共産主義は打倒されねばならぬ，そして何としても破滅に追い込むべき歴史のひとこまであると述べている。フランスには，マルクス主義を19世紀のイデオロギーとして博物館送りにしたがる政治家や哲学者たちがいる。

真実のところ反対者たちは社会主義を恐れているのである。二大社会体制間のイデオロギー闘争は跡絶えることはない。双方に戦場から撤退の意志はない。だが，私たちの反対者は人類の運命を決する重要問題に対する解答を持ちあわせていない。社会主義を扱う時，彼らが嘘に頼り現実をねじ曲げるのはこのためである。

社会主義の定義

コーエン…　私たちの時代の全体像の把握に努めながら，私たちが社会主義と呼んでいるところのものを定義できるだろうか。再びこの問題に立ち戻らねばならないことを避けるために，ここで，マルクス主義理論によれば資本主義の後に続くのは共産主義であり，それは二つの段階において実現されること，そして最初の段階が社会主義であり，第二段階が言葉の厳密な意味での共産主義であるということを述べておこう。私は，このことをただ用語法にまつわる何らかの誤解を避けるために言っているにすぎない。

アツェール…　マルクスには当然彼自身の共産主義理論があったが，ここでは私たちの対話の性格を保持して，理論的説明には立ち入らず社会主義に関する具体的論点について語るということでお許し願いたい。なるほどマルク

スが述べているように，優れた理論にまさる実践的なるものは存在しないが，具体的な政治的実践が主題になるやいなや科学的社会主義の創始者はユートピアを拒否し素朴な幻想の霧を拭い去った。『ドイツ・イデオロギー』の中で，マルクスとエンゲルスは，共産主義は創出される状態ではなく，現実がそれに調整されるべき理想でもないと論じた。マルクスが共産主義とよんだのは，現存の状態に終止符を打つ現実の運動であった。

社会主義を定義することは可能であるし，また定義しなければならないが，机上の定義をもってしてはうまくいかない。マルクス，エンゲルスが共産主義の第一段階として想定した社会主義は既に具体的形態をとっている。彼らによれば，社会主義は工業的に発達した諸国民の同時発生的行動から生まれる。これが，社会主義が勝利の行進を開始するやり方である。しかし，現実に社会主義が最初に勝利をおさめたのは強大ではあるが未だ工業化されているとはいえない国においてであった。人民民主主義国やアメリカ，アジアの新しい社会主義国の場合も予めの想定通りとみるのは困難である。

レーニンは，生産手段の社会的所有を社会主義の背骨とみなした。たしかに背骨は必要だが有機体は背骨だけからなるのではない。新しい所有条件を基礎にして政治体制・機構が現れる時，社会は社会主義と呼ばれうるというのが私の見解である。この体制においては，それにふさわしい体制的及びイデオロギー的上部構造もまた形成される。障害に出くわし，息つぎを余儀なくされ，危機にさえ直面するが，社会主義の歴史的目的は，一貫して労働者の福祉，人々の物質的，文化的，政治的，道徳的進歩であり続け，このような目的が見失われることは決してない。進歩のペースが変わったり，様々な側面の発展が不均等である場合もある。しかし（カンボジアの場合がそうであったように）歴史的目的が否定されている所で社会主義を云々することはできない。

歴史的過程

コーエン…　多数の著作が，もろもろの法則の確定や段階区分の問題を取り扱っている。そこでは発達した社会主義の段階について論じられ，社会主義段階と固有の共産主義の間の差異が論じられ，あるいはまた社会主義が一つの独立した社会・経済構成体であるか，それとも過渡的段階にすぎないかということがあれこれ考察されている。

私は，完結した過程を相異なる独立的な諸段階に分割するのを好まない。

ましてや，各々全ての国がこれら諸段階を一つずつ決まった順序で通過しなくてはならないとは考えない。ところで，私たちの対話の主題は初めからずっと社会主義だが，あなたも指摘したように，あなたの国の公式名称はまだ社会主義共和国とはなっていない。

アツェール…　歴史的過程の理解のためには段階区分が必要である。歴史的発展は継起的であって，特定段階の跳び越えは可能ではない。これまでの経験にもとづいて，私たちはあらゆる社会主義革命に必要な段階ないし局面を定義することができる。しかし，個々の段階がとる形態はこれまで国によって多様であったし，将来もまたきっとそうであろう。この点に関しての法則の確定は不可能であろう。現実には意外なことが待ち構えているであろう。私たちは社会主義に一挙に到達するわけではないし，また同じやり方で辿り着くわけでもない。

私は，共産主義を行動によって特徴づけられる社会というように思い描いている。それは，人間の潜在的能力のまばゆいほどの発露をともなうであろう。創造的労働によって思考と行為の間の完全な調和が示されるであろう。

コーエン…　私たちは，何度も社会主義国の党及び社会の危機についてざっくばらんに語りあってきた。すなわち，ハンガリーの1956年の危機やチェコスロバキアの1968年の危機，さらにポーランドの1981年の危機などについて……。

アツェール…　しばしば，社会の二つのタイプの矛盾を同一視して危機という言葉が使われているが，幾人かの指導者の主観的誤謬のために社会主義国において劇的で悲劇的ですらある事態が展開されているような時には，私はそれを社会主義の一般的危機とはみなさない。既に述べたように，これまでの社会主義の歴史において危機的時代があったことはたしかであるが，私はそれが体制としての社会主義の危機を意味するものであるとは考えない。ブルジョワジーの危機の徴候がしめされる時にバンデ（フランス革命期の王党派の反乱の地――訳者）が立ち上がったというわけではないのである。そうした深刻な危機の主な原因は，指導部がおかした一連の政治的誤りであった。

社会主義の経済的・社会的発展過程における必要なステップとしての急激な変化ということになると事情は全く異なる。現在，私たちは外延的工業発展から内包的経済発展に転換しなければならないが，このことは疑いもなくもろもろの困難の原因となる。なぜなら，これにともない企業や政府当局，さらには労働者にいたるまで新しいやり方を要求されるからである。個人には独創性や自主性，さらにこれまでよりも正確な仕事が要求され，企業には，

より高度な組織性，イノベーションや大胆な革新をより積極的に受容する姿勢が要求される。また，政応当局には，戦略目標を明確に定式化し，経済規制システム，教育・訓練システム，文化的諸過程及び研究開発活動の指導をたえまなく改善することが要求される。これは，私たちがまだ経験していない分野である。社会主義国の政治指導者は，このような変革を実現するということは工業化や大規模農場の組織化よりも複雑な課題であるとますます頻繁に主張するようになってきているが，これは全くのところ真実である。しかし，それ自体を危機的状況であるとは言えない。それは新しい発展段階の開始なのである。

二つの要因が私たちの仕事を非常に困難にしている。第一に，私たちは他の工業国の場合と比べて，はるかに短期間で外延的経済発展から内包的発展への転換を実現しようとしている。より頻繁に摩擦が生ずるのはこのためである。第二に，私たちは大きな帰結をもたらす転換に努めているのであるが，それを取り巻く国際的経済・政治環境は，最近明らかに不利なものになってきている。

人的要素

アツェール…　内包的発展のために最低限必要とされるのは，生産諸要素の再配置である。工業化の時期の基本課題は，効率的に利用されていない労働力に，用具，原料，エネルギーを供給することであった。それ以来，非農業労働に押し寄せる大衆を全く異なる生活様式に適応させるために訓練することに注意が払われねばならなかった。私たちはそれに対処してきた。そして，いまやハンガリーでは就業者の半分以上が熟練労働者ないしはそれ以上に高度な資格をもつ人々で占められるに至っている。農業の国民所得への貢献度は低下してきているが，それは著しく収益的になり，また専門的技術を必要とする資本集約的な，まさに工業に類似のものとなってきている。それとともに，経済政策の中心は変化した。これまで私たちの注意は，投資プロジェクトや原料，エネルギーの供給に向けられてきたのであるが，いまや人的資源が注目されるようになっている。何よりもその質の面，すなわち専門的技術，系統性，積極性，信頼性などが重視されてきている。

さらに，このような変化は生産分野にとどまらず，意識や生活諸条件，習慣などの根本的変革をもたらし，またそれを前提とする。過去数十年間のハンガリーの福祉政策の中心は，何よりもまず文字どうりの貧困と無知の除去

におかれてきた。食糧，衣服，住宅，初等教育，保健施設を量的に確保しなければならなかった。そして，いまや私たちはあらゆる努力を生活条件の質的改善に集中すべき地点に到達している。これからの数年間，私たちは早いペースで生活水準を引き上げる余裕をもたない。そこで，現在のところ労働条件や労働モラル，さらには生活様式の質的改善に力をいれている。これを実現するには，幾多の障害の除去が必要であるし，遠まわりや妥協も必要とされる。しばしば，苦しいジレンマに直面する人々もいて，彼らにとって生活は容易ではない。

そうした場合，私は危機というよりもむしろ歴史的に必要とされる急激な変化という表現を用いたい。歴史が私たちに教えてきたように，社会主義のあらゆる新たな発展段階に固有の可能性を実現する闘いが，時には困難な環境の下で行なわれねばならないこともあるのである。

個人崇拝

コーエン…　極端に中央集権的な権力，個人的性格の権力，ドグマティックなイデオロギー，さらにまたしばしば恐ろしいほど抑圧的な諸方策などといった現象が，社会主義に傷跡を残し，さらに長期にわたって国際共産主義運動に汚点を残した。通常，これらの現象には「個人崇拝」という名称が宛てがわれている。

私は，まず最初に「個人崇拝」という用語を使うのには賛成でないと言っておかなければならない。それには，一つの特質で他の全てをくるむという欠点があるからである。

アツェール…　その用語が正確でないという意見に私も賛成だが，それよりもぴったりくる表現もない。

コーエン…　専制とか個人権力と言うほうがましだが，これもまた適切ではない。スターリニズムという用語にも欠点がある。それは，一見すると「崇拝」の意味あいを拒否しているようにみえるが，実際にはその影響を免れてはいない。

アツェール…　それら全てが誤解をまねく表現であるというのは本当だ。個人崇拝がなくとも専制は成立するし，権力の座についていない党にも個人崇拝は存在する。

もろもろの要素のうちの一つだけを使って，そのような事実の全てを記述するのはむずかしい。なぜなら，全ての要素が同じ時期に存在することなど

なかったし，現在もないからである。

コーエン…　述べてきたような事柄は，社会主義の全ての国々に実際にはっきりと存在していた。事情によっては，その他の国の共産党内においてもそうした装いがみられた。このことすべてを，関係のある個人の性格のせいだけに帰すことはできない。私は，むしろ，社会において彼らがどのような役割を果たしたのか，また，――いまでも過去の名残が見られる場合，あるいは過去への退歩がみられる場合には――彼らがいまどのような役割を果たしているのかということや彼らの動機を検討し，さらにまた誰が彼らを支持しており，彼らによって利益を得ているのは誰かということを吟味することのほうが必要であると思う。

アツェール…　個人崇拝がどこにでも存在したわけではない。さらに，崇拝と指導者が享受した個人的人気とを混同してはいけない。崇拝を作り出さなくとも，人々から認められ尊敬される人物や指導者はいるものである。他方で，最初不人気であった人物が公的奨励で崇拝されるに至ることもありうる。双方が同時に起こる場合もありうる。当然の懸念と嫌悪からではあるにしても，今日私たちは個性の果たす歴史的役割の分析を怠っているように思われる。崇拝は，大衆の創意の道をふさぐというだけではなく，個性の成長をも抑圧する。

コーエン…　たしかに，指導者の個性の果たす役割は実際に大きい。しかし，ある種の環境の下である種の人物が指導者になるというのはおそらく単なる偶然ではない。個人崇拝を一方で非難しながら，他方でなお個性について論じることについては何かしら抵抗もある。

アツェール…　そこに矛盾があるとは私は思わない。個人崇拝は，客観的要因と主体的要因がそろった時に生じる。つまり，国際的レベルでの政治的孤立化，未経験，もともとのメシア的信念，強いられた工業化など，これら全てのことが客観的土壌となって偏狭で歪んだ専制的政治権力が成立しえたのである。レーニンがもう少し生き永らえていたら，事態がどう転んでいたかという点については誰しも答えようがないが，全てにわたって違った展開となり，一連の歪みは生じなかったはずである。運動が権威ある人物によって率いられることは必要なことである。しかし，媚ではなく自立的精神こそが人心を掴むということを確信している人物でなくてはならない。尊敬を受けている人は，自立的で自由な個性を養成することができる。しかし，これは個人崇拝とは縁もゆかりもないことである。

コーエン…　私たちはいま何が「崇拝」でないかということを議論している

が，それでは「崇拝」とは何であろうか。

アツェール…　レーニン主義的集団指導が死に絶えた所で専制の恐れが生まれる。現実の深い分析にかわって，きまり文句や引用や極端な単純化があらわれる。そして，自分が全智全能の神，唯一無二の偉大な存在だと宣言する個人があらわれる。集団指導が存在するか否か，民主集中制が存在するかどうか，真の民主主義が存在するかどうかということが常に問題なのである。

独断的なやり方に訴える指導者は，大衆が社会主義を理解し受け入れるということに確信を持っていない。人間に対する信頼がなく人間が尊敬されず，「社会主義とは苦役である」と言われているような所で個人崇拝が形成され，これに付随する全ての現象があらわれる。

くりかえしになるが，党内民主主義が最も重要である。見世物裁判がもたらした影響をあなたは御存知だろうか。ハンガリー労働人民党内部の民主主義は消滅し，党と大衆の関係は破壊されてしまった。本質的に，党は一つの派閥にのっ取られてしまったのである。

個人崇拝はゆっくりと一歩一歩形成された。ラーコシ（1945～56年ハンガリー党書記長をへて第一書記。小スターリンの異名をとる。スターリン批判の後，56年7月党第一書記，政治局員を罷免される――訳者）は，「賢明なる指導者」と呼ばれるようになった当初驚きの色をみせたがそれを拒否しなかった。そして，やがてその呼称に慣れ親しむようになった。私には，1949年当時，地方の党書記で召集を受け会議に出席したことのある知りあいがいる。彼はラーコシを尊敬してはいたが，自分の地方に関わる問題で，ラーコシがかつて誤りをおかしたという点を指摘した。すると，ミハーイ・ファルカシュ（ラーコン時代にゲレと並んで彼の側近をつとめる。ラーコシとともに失脚――訳者）が叫び出した。「我々の偉大な指導者が誤りなどおかすはずがない。そのことをお前の頭によくたたきこんでおけ」と。ラーコシは，自分で抗議するかわりに，これに満足そうにうなずいた。当時まだ若かったその地方党書記は，ラーコシ同志は誤ることなどないのだと自分に言い聞かせながら一晩中部屋を歩き回った。そして，最後にはそう信じるようになったのである。

コーエン…　広く根づいた支持がなければ，そうした現象が蔓延するなどとは理解できないが。

アツェール…　社会主義建設の最初の段階では，歴史に残るようなさまざまの重要な成果が得られた。まさに，このことが，何の障害もない一直線の進歩という幻想を生み出したのである。幻想というものは，伝染しやすくまた

魅惑的でもあるので，実際には問題が生じている時でさえも，人は好んでそのとりこになってしまうものである。

一方で，多数の人々にとって個人崇拝は非常に好都合であった。権力に組みする人々にとってだけではない。誰も思考する必要がなかった。つまり，問題があればラーコシだけに考えさせ，それを処理させておけばよかったのである。

他方で，初発段階の成功によって誤りが隠蔽され，あるいはまた誤りに寛容となる空気が生まれた。

個人崇拝は，まさに社会主義建設の初発段階における重い小児病であった。議論や疑い，あるいは率直かつ自由な現状分析を抜きにしてマルクス主義は成立しえない。日々の現実が生み出すもろもろの矛盾の対処において主観がはびこると必然的に歪曲があらわれる。

コーエン…　何を考えるべきか指図されるようになると，人々は考えることをやめてしまうだろう。

アツェール…　そのような人もいるし，ますます希望を失う人もいる。どちらにしてもこれは非常に深刻な問題である。本来，人間のために存在しかつ合理的であるべき社会においてはとりわけそうである。

個人崇拝は回避できる

コーエン…　しばしば，反対陣営からだけではなく次のような見解が聞かれる。社会主義の初発段階には，途方もなく大きな諸問題の解決を迫られるので，権力の集中化や，国家による強制の多用が必要となる。「個人崇拝」がこの集中化と強制の手段となるのは当然の成りゆきだという見解である。

アツェール…　レーニン時代にも，集中化が必要であり，数えきれないほどの難問が発生したが，「個人崇拝」は存在しなかった。社会主義のいかなる段階においても，いかなる事情のもとでも，個人崇拝が歴史的必然性をもつなどということはない。いまなお，個人崇拝があったから種々の成果が獲得されたと信じている人々がいるが，そうではない。個人崇拝があったにもかかわらず成果が得られたのだということを私は強調しておきたい。

もっぱら個人崇拝を正当化するために困難な事情ということが口実にされた。個人崇拝の支持者は，人々が文盲で政治的に未熟だったから，疑問の余地のない権威が必要であったとか，当時は外的脅威によって特徴づけられる時代であり，全ての出来事はそこから説明されると主張する。そうではない。

個人崇拝は必要ではなかったし，その広がりがもたらしたものは，どこにおいても，運動に対する深刻なダメージであった。

ブルジョアジーは，当然のように好機をのがさなかった。彼らは，過去の誤りの摘発を他人の不幸を喜ぶ気持で聞いた。私たちが批判しそこから脱却して既に久しい過去の歪曲，誤謬，罪を最大限利用しつつ，ブルジョア・プロパガンダはこの過去の出来事と，現在の共産主義運動及び現存社会主義を同一視することにつとめ，古くさい悪口を再三再四くりかえしている。これまで何度もブルジョア・ジャーナリストたちに向けて言ってきたことだが，もし私たちが同じようにして50年前か100年前に資本主義やその政府がおかした行為を責めたてるようなことをすれば，彼らは私たちを正気扱いしないだろうに。

コミュニストは自分達の運動を再生させようと決意している。過去の誤りは，私たちにとって恐ろしいほどのショックであったし，私たちに多大な影響を及ぼした。いまなお私たちはそれに関心を払わなければならない。

コーエン…　にもかかわらず経験が示しているのは，現在でも共産主義運動は個人崇拝の特定の遺物から自由ではないということだ。

ひとつだけ言っておくと，大量懲罰の手段としての収容所はもちろん廃止されたけれども，中国の文化大革命及びそれに対する巻き返しの際にその種の手段が使用されたということがある。とにかく，まだ痕跡は残っている。不毛のドグマティズムの根は深い。植民地的地位から脱出し，しかも社会主義の道に乗り出している国々で個人崇拝の面影をつよく偲ばせる事態が進行していることは少なからず注目されるところである。

アツェール…　私には，第三世界の諸問題を論ずるほどの能力はないが，ひとつ確かなことは，帝国主義に対する闘争のなかで民族的一体性が強化されたということである。勝利の後には，しばしば帝国主義の支援のもとに分裂勢力が現われるものである。一種の人民戦線政策というべきものを次いでいると，権力の過度の集中化の危険が生まれる。そのような国々においては，統一をめざす諸勢力を連帯させ，国の建設と防衛にそれぞれを主体的に参加させうる方策が見い出されねばならない。ドグマティズムの一定の特徴がまだ残っており，再現もみられるという点について，あなたが，たえずそれらを摘発し克服することの必要に言及しているのは正しい。しかし，ドグマティズムの根拠が除去されても，怠惰な思考，道徳的勇気の欠如，不充分な現実認識などが長期にわたってそうした態度を生みだすこのうえもない温床になるであろう。今日私たちが闘うべきは，再生を妨げる保守的ドグマティズ

ムである。すなわち，今では古い意味でのセクト主義的ドグマティズムは既に力を失っている。しかし，付言しておくが，反ドグマティズムがドグマに転化してしまうこともある。この反ドグマティズムという名のドグマティズムが特に生産的であるなどとはいえないのはもちろんのことである。最後に，社会主義の反対者の間では，おそらく以前よりも一層強く，どす黒い右翼的・反共的ドグマティズムがはびこっている。彼らは，いまだに過去の社会主義についての彼ら自身のドグマにとりつかれている。そしてそれは，当時私たちが自分たちのドグマにとりつかれていた以上にである。

社会主義的民主主義，それにふさわしい制度，さらにそれを求める闘いこそが個人崇拝と呼ばれる事態の再現と闘う最も信頼しうる保証となるのである。

直ちに全てをという考え方

コーエン…　大多数の人々は，全力を尽くして闘ったとしても，どんな制度においても貧困，不正，不平等が存在するのを当然のこととみなしている。ところが，社会主義が問題となると，人々は直ちに全てを手に入れようとする。そして直ちに全てが手に入るということが，社会主義に対する本能的賛辞のひとつなのでもある。

アツェール…　人々は，資本家たちが当然のごとく行なう日常茶飯事の不正に対し，たとえそれに異議を唱えることはあっても，やはり耐え忍んでいる。彼らが，社会主義に「直ちに全てを」ということを期待しているというのは思いこみであろう。その証拠に彼らは――しばしば正当な理由で――私たちを批判することはあっても，将来には不正から自由な社会が実現されると信じている。もし，彼らが私たちに対して不寛容で根拠のない判定を下すようなら，それは私たちの方の責任でもある。

全ての革命政党や革命運動がそうであったように，私たちもまた過去において，一刀のもとにあらゆる不正と不平等を除去しうると信じていた。もろもろの問題の根本的原因は過去の資本主義に求められると考えがちであった。戦争の嵐が過ぎ去った時，当然のことながら希望は一層高まった。私たちはできる限り早く国の再建に取りかかった。そしてこれに成功し，希望はさらに一層かき立てられた。社会主義が全ての難事を除去する万能薬ではなく，それ自身困難を抱えており，劇的対立さえ伴なうことが立証されたのはその後のことである。この後（私たちに対する）批判は，より客観的で現実的で

日常的なものになった。もちろん，私たちはドグマティックな左翼的非寛容さにでくわすこともあるが。

オプティミズムについて

コーエン…　私たちの対話の最後に，もうひとつ，おそらく一種の総括となる質問をさせていただきたい。コミュニストであり革命家であるということは，変化を望み，新しくよりよきものを創造するために一生懸命に働くということである。つまり，オプティミストであるということである。あなたをオプティミストたらしめているのは何であろうか。

アツェール…　それは，全世界のコミュニストをオプティミストたらしめているところのものと同じである。鈍感さゆえに満足している人々がいるが，彼らのオプティミズムは無為からなる。革命家のオプティミズムは，あるがままの世界の是認から生まれるのではなく，その否定から生まれる。人間を取り巻く諸条件は変えられうるし，人々がそれらを変革するのは可能であるという確信が革命家のオプティミズムである。彼が，世界を変えようとするのは，この世が人間にとって満足のゆくものでないからである。

オプティミズムは，失敗を認めるのを妨げるような幻想の形をとることもあるが，失敗から教訓を汲み取るのを可能にする現実的形態もとる。マルクスを思い起してみよう。彼は，パリ・コンミューンの勝利のための十分な条条が存在しないことを確信していたにもかかわらず，それを支持した。マルクスは，歴史を，記述する人々の目を通してではなく，それをつくる人々の目を通してながめ，労働者階級は，ただ自分たち自身の――時には否定的な――経験からのみ学ぶことができると確信していたのである。

人類を脅かす様々の危険な事柄が私を不安にさせる。しかし，私はこの不安が大衆を行動に駆り立てるのだということも知っている。このことがまさに私をオプティミストにするのである。

このことを何度繰り返しても強調しすぎにはならないと思うが，社会主義の偉大な成果は人間による人間の搾取を廃止したことにある。これは出発点である。社会主義は人間の真の多面的能力及び権利の受託者である。それ故に私は歴史の審判を信頼するのである。

人類は存続する限りにおいて歴史をもつ。気がかりなのは，核戦争の危険だけではない。大量殺戮の危険とは規模が異なるといえども，燃料及び食糧不足のおそれ，環境汚染，さらに地球全体を脅かしているその他もろもろの

問題も気がかりである。人類は，より多くのものを生産しそれらを一層改善するというだけではなく，生産のあり方を変えなければならない。テクノロジーの際限なき利用に完全な自由を与えるべきではないが，また，テクノロジーが環境保護の唯一の手段であり，数十億の人々が生存のためにそれを必要としているのを忘れて，環境保護を口実に進歩をストップさせるようなことがあってもならない。

機会を提供する社会

アツェール…　ささやかながら一助となるよう，私たち自身の経験から何か結論を引き出しうるとすれば，次のようである。私たちは，長期的で大きな社会的展望を見失うことなしに，現実的目標を設定しなければならない。全ての人間的価値や，社会主義の獲得物を擁護しつつも，新しいよりよき方法を探究しなければならない。かりに，それによってゴールにより早く到達でき，労力も少なくてすみ，あるいは問題となっている障害を乗り越えることができるなら，踏みしめてきた道からそれてもよい。

現在，ハンガリーにおいて，よく均衡のとれた状態がみられ，あらゆる困難にもかかわらず進歩があるのは，現実が新しく投げかける問題に対して私たちが常に新しい解答を探究してきたからである。目標を見失わずに，それに至る多様な道と手段を探し求めるべきである。

くりかえしになるが，社会主義とは機会を提供する社会（the society of opportunities）である。そして，人間に与えられる機会（human opportunities）には際限がない。人類は，自分たちの必要や欲求を充足するとともに，常にまた新しくそれらを生みだす。

革命の勝利とともに権力の座につく新しい諸階級は，彼らの前任者から悪い習慣をも引き継ぐ。この社会は，ひよわではあるが，多くの事柄を成し遂げうる，しかもそのための力も充分もっている人々によって建設される。私たちは，人間の内にある善なるものを尊重し発展させる社会を建設する。

クリッパー（蒸気船の出現する前の快速帆船――訳者）の保有者たちは，最初の蒸気船のことを「蒸気のやかん」（puffing teakettles）と呼んだものである。実際に，最初の蒸気船は不格好そのものであり，音も非常に大きかった。しかし，未来は彼らのものであった。

私たちはいま未来の戸口に立っている。しかし，忘れてはいけないことは，蒸気は，ただ，より速く進む可能性を提供するにすぎないということだ。現

実には石炭の品質や，テクノロジーや，機関士及び船長の腕に左右されるところが大きい。機関士が，計器のシグナルを無視したりボイラーをオーバー・ヒートさせたりする時に，エンジンにどんな価値があろうか。しかし，実際において必要な腕を欠いていることがしばしばあった。最も性能の良い帆船が新参者より遠くまで航海することが何度もあった。それでもなお未来は蒸気船のものであった。